

京都外国語大学 ラテンアメリカ研究所 紀要 2018

<論文>

ちからをはかる：後古典期後期マヤの戦闘の一概念

..... 郷 澤 圭 介 1

<研究ノート>

マンガで学ぶ郷土の歴史と文化遺産

—メキシコ、トラランカレカにおける遺跡に関する住民の知識と経験をめぐって—

..... 小 林 貴 徳 25

<調査研究報告>

ニカラグアのカリブ海沿岸地域、ブルーフィールズにおける文化再生

—芸術活動の空間と音楽に秘められたメッセージ性—

..... 青 木 敬 47

イグレシア・ビエハ (Iglesia Vieja) 遺跡の調査

..... 金 子 明 67

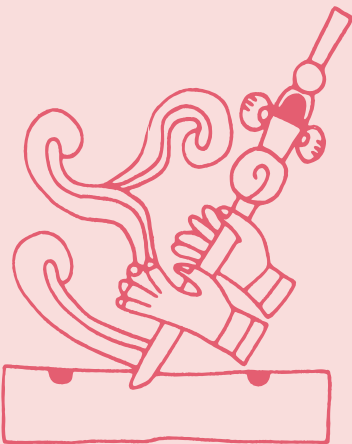
Surcos de cultivo prehispánicos encontrados bajo las cenizas del Volcán Plan de la Laguna, El Salvador, C.A.

..... 柴 田 潮 音、オスカル・カマチヨ、
ホセ・ガブリエル・セレン、ジェニィ・エリサベート・メンヒーバル 99

<書評>

桜井三枝子編『グアテマラを知るための67章』【第2版】

..... 牛 島 万 115



〈書 評〉

桜井三枝子編『グアテマラを知るための67章』【第2版】
(明石書店 2018年 392頁)

牛 島 万*

本書は桜井三枝子編『グアテマラを知るための67章』【第2版】(明石書店、2018年7月)である。筆者は実際に初版を手に取り比較しているが、前作から12年が経過し、大幅な記述の追加、修正を行なったことがわかる。結果、初版より2章ほど増え、かつ、執筆者についても初版の24名からこのたび35名になっている。まさに質量ともに立派な「改訂版」である。

目次を見ると、はじめに、のあと、I グアテマラへの誘い(第1章～9章)、II マヤ文明の時代(第10章～14章)、III スペインの征服と植民(第15章～21章)、IV スペインからの独立と近現代(第22章～27章)、V 現代の政治と経済(第28章～39章)、VI 紛争を乗り越え多文化主義へ(第40章～46章)、VII 宗教と伝統(第47章～54章)、VIII 言語と人々(第55章～60章)、IX 文化と芸術(第61章～67章)、最後に参考文献リストが付されている(初版では、巻末に索引があったが、本改訂版には付いていない)。

おそらく本書は邦語で執筆されたグアテマラの歴史、文化、言語、政治、経済等のテーマを不足なく盛り込んだ単行本としては類書を見ないものであり、極めて貴重な文献であろうと考える。グアテマラの専門家や学者が結集し、編纂された書物であるだけに、読者には極めて刺激的で有益な情報が提示されていることは想像に難くない。この点、編者が、執筆者の選定という第一の難題を見事に克服したこと、また、その後の構成や編集作業において、極めて優れた能力を発揮されたことを高く評価したい。筆者もラテンアメリカを専門とする者ではあるが、今回新たに得た情報は少なくなく、大いに啓発された。その意味で、明石書店の「エリア・スタディーズ」は、通常、一般書の位置付けがなされているが、本書はその域をわずかに超え、専門的な記述にも及んでいたと思う。それだけに、編者が「はじめに」のなかで、「読者はどの章から読み始めてもよい」と述べているが、筆者も同感である。それは、グアテマラや中米に単純に興味を示している一般読者が、この1冊を読破するには、その専門性や情報量の多さにより、それ相当の労をとまなうことが予想されるからである。それだけに、本書が良書であることは間違いなく、専門家にも十分読み応えのある書物であることの証左となっている。

ところで、各論で学んだ膨大な知識や情報をいかに組み立てていくか、は最終的には読者に委ねられることになるのだが、とかく共著の場合は単著と違い、その特質からそうならざるをえない。

第4章34ページにあるように、1985年憲法で、グアテマラの異文化に対する敬意や尊重が法的に認められた。また、ここで、その対象となったのがマヤを祖先とする先住民民族であった。二言語制度やマヤ言語アカデミーの設立も規定されている。さらに、第41章221ページにあるように、その後の発展において、1995年に「先住民民族のアイデンティティと権利に関する合意」に調

* 京都外国語大学

印、つまり、この段階でグアテマラの多文化、多言語が承認された。また、先住民として、マヤ以外に、ガリフナとシンカが新たに認められた。しかし、このときに、いわゆる文化面における合意だけでなく、土地に関する権利を含めた政治的、経済的権利の承認事項まで含むものであったので、憲法改正には至っていないのが現状である（220-221、224頁）。この一例だけをとり、いわゆる多文化主義政策の限界について読者は知り得るのである。先住民の自律権を、政治や経済面まで拡大して要求することは多文化主義を逸脱することでもあり容易ではない。また先住民の権利は集団の権利であり、個人のそれではないことも、法の落とし穴であろう。

他方、民族性やアイデンティティが、文化の相違による「線引き」（恣意的境界）で成り立っているという現実もいくつかの章内容を関連付けることで、より鮮明になる。第12章82ページによると、ティカルやセイバルというアイデンティティは先スペイン期にあったが、当時、マヤという民族性はなかった、という一般読者には驚きの見解が出てくる。これは、恣意的な政治的理由からマヤ民族は創られたということを含んでいるに等しい。マヤという呼称は、後から入ってきた外国人による呼称であり、1996年12月の36年に及ぶ内戦終結の和平合意で「マヤ系先住民とマヤ文明の遺跡の歴史的な連続性が初めて公式に認定され」、さらに「国境を越えた『マヤ』の連帯意識が広がる汎マヤ運動を活発化」し、「多くのマヤ系先住民が、歴史上初めて『マヤ人』と自称するようになった」のである（82頁）。

非マヤ系先住民による文化の境界線が、いわゆるマヤ低地の遺跡を現代マヤの聖地と化し、そこを高地マヤ系などの他の先住民にも崇めさせ（82頁）、さらには現代観光業の発展にその地理的空間とそれを支える歴史観や伝承がうまく順応しているというわけである。その意味において、19章で述べられている大変興味深いマヤ人の歴史観は、現代人の歴史観にも見られるものであると思う（119-120頁）。

また、第41章222頁に、統計の数値が少し古いが（2002年データ）、マヤ系民族およびガリフナ、シンカの各民族の人口統計表がある。グアテマラ総人口が605万4,227人（1981年）から、1,123万7,206人（2002年）へと約20年間で600万ほどの急激な人口増である。その理由については格別記されていない。さらに、マヤ系が253万3,606人（1981年）から、441万1,961人（2002年）へ約200万増、同じくガリフナ民族の場合、2,790人（1981年）から5,040人（2002年）、シンカ民族の場合、127人（1981年）から1万6,214人（2002年）へ、さらに本文中の記述では、2007年のシンカ民族議会は16万に達しているという。このあたりの詳細な背景については、合意による「シンカの先住民認知があった」とだけ述べられているが（222-223頁）、これを先住民側の「戦略」的行動と考えるのはどうだろうか。ガリフナ民族に関しては、60章の記述内容に基づく限り、「人種」としてのアフロ性を表面上出さず、カリブ海先住民性、あるいはキリスト教文化の受容など、つまり「文化」を前面に出すことで生き延びることに成功した（317、321-323頁）。これに従うなら、ガリフナの場合、半ば彼らの戦略性が確認できる。しかも、後世、ガリフナは先住民に認定されるに至ったのである。

加えて、先の人口統計を見ると、先住民人口が253万6,523人（1981年）から、443万3,218人（2002年）へ増えている反面、非先住民も351万627人（1981年）から680万3,978人（2002年）に増加している。その背景として、自己申告制の落とし穴が指摘されている。「都市部や若年層において先住民帰属意識が相対的に低くなってきている」と書かれているが、それがなぜなのか、これも現代先住民の社会的向上や諸権利獲得のための「戦略」的な行為なのかどうかは明らかにさ

れていない。国家や政府による恣意的な文化的境界とそれに伴う民族集団区分、あるいは、先住民の自治への制約に対する「静かな抵抗」なのか、それとも、非先住民と同じ土俵に立って自治の獲得と参加を求める新たな決意表明なのかどうか、個人的には興味のあるところではある。

20世紀はとかくイデオロギーの時代だったと言われるが、冷戦期の時代を実際に経験していない若年層の読者ではあれば、今ひとつラテンアメリカが置かれていた基本的な状況が把握しにくいかもしれない。政軍関係や民主化に着目してグアテマラ史をみた場合、冷戦期の親米と反米の狭間において振り子のように揺れ動いたグアテマラの現実があったはずであるが、米国の干渉がその梃子入れとなった。ところが、アルベンス政権に対する米国CIAのクーデター干渉という史実が明確に示されていない(第25章)。農地改革による土地なし農民に対する土地の再分配という、きわめて左翼的な大改革を実施しようとした軍人の先駆けがこのアルベンスではなかっただろうか。中南米の民主化や人権侵害という歴史を扱うときに、とかく軍部が左翼運動家や市民を弾圧していったという史実が先行し、軍部は民主主義の敵というイメージで見られがちである。現に、第24章および25章では、アルベンスの改革期が「春」であったと繰り返し述べられている。その理由は、農地改革を実施して貧農の権利を推進しようとした、換言すれば、アルベンスが民主化の推進者であったことに起因している。ところが、この記述に呼応してか、第40章では、アルベンスによるグアテマラ革命は、先住民にとっては「グアテマラの春」ではなかった、と記されており、まるで両者が対立する意見を述べているかのように見える。だが、前者は為政者としての軍人アルベンスに対する評価であり、後者は反革命勢力と米国の干渉などの圧力による革命の中断に加え、先住民の社会的疎外化が民主主義の進展を阻止したことを意味する表現である。従って、24章と25章の次に、40章へ誘導される形で合わせて読めれば、そのあたりの微妙な歴史解釈に対する読者の理解は一層深まったのではないかと思った。ちなみに、アルベンスは1954年のクーデターで失脚して国外亡命を余儀なくされ、二度と祖国に帰還することは認められなかった。「共産主義者」のレッテルを貼られたまま、1971年、亡命先のメキシコで死去した。また、「グアテマラの春」の挫折は、その後の長期化する内戦を惹起する要因となった。その意味では、今一度改めて、グアテマラの「春」とは、いったい何であったのかが問われなければならない。

以上述べてきたが、このように各論をつなげて全体を見る過程で、さまざまな理解や発見ができたのも、やはりそれぞれの各論の質の高さに尽きる。筆者にとって、大変有意義で、本書の内容や主張に共鳴する点が多かった。

BOLETÍN del

Instituto de Estudios Latinoamericanos
de la Universidad de Estudios Extranjeros de Kyoto

Instituto de Estudos Latino-Americanos
da Universidade de Estudos Estrangeiros de Kyoto

2018

<ARTÍCULOS>

- “Medir la fuerza”:
un concepto de la batalla maya en el Posclásico tardío
..... Keisuke GOZAWA 1

<NOTAS Y COMENTARIOS>

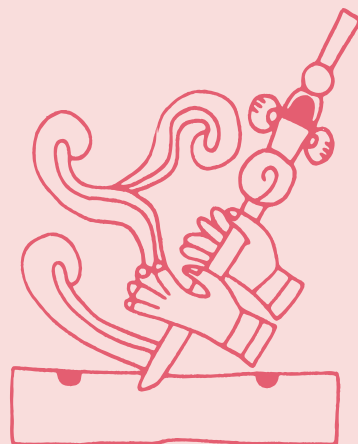
- El *manga* como herramienta didáctica para la difusión del patrimonio cultural
y la historia local: el conocimiento y la experiencia que la población tiene con
el sitio arqueológico en San Matías Tlalancaleca, México.
..... Takanori KOBAYASHI 25

<NOTAS DE INVESTIGACIÓN>

- The Cultural Revitalization in Bluefields, Caribbean Coast of Nicaragua:
Spaces for Art Activities and Musical Expressions
..... Kay AOKI 47
- Investigación del sitio arqueológico Iglesia Vieja
..... Akira KANEKO 67
- Surcos de cultivo prehispánicos encontrados bajo las cenizas del Volcán Plan
de la Laguna, El Salvador, C.A.
..... Shione SHIBATA, Oscar CAMACHO,
José Gabriel CERÉN y Jenny Elizabeth MENJÍVAR 99

<RESEÑA DE LIBROS>

- 67 capítulos para conocer Guatemala, segunda edición, compilado por Mieko
SAKURAI Takashi USHIJIMA 115



Vol.
18